# ミネソタ便り

▼04・12・04　平 野 茂 樹

❶ 北 米 初 感

●●●・・・・　いま、アメリカはミネソタ州の北のはずれ、カナダの国境から９０マイル、ノース・ダコタ州のグランド・フォークから車で３０分ぐらいのところにある Crookston という人口約１万人の小さな町に長期滞在しています。

カソリック系の教会に付属する小中学校で来秋まで田舎教師をやっています。週１４クラスを消化するハードな毎日ですが、自分を鏡に映すような子供たちの反応やすごく基本的なことを正確に教えることの難しさが、すべてのことを忘れさせてくれ、わくわくし、集中させてくれています。

ここに来る前は、ワシントンＤＣで教師見習い研修を受けていました。今回は文化交流を目的とするビザを取得し来ています。目的さえ守れば働いても良いし、何でも出来ます。

研修の合間にいろいろなことをしました。そのうち、面白いと言うか、やったぁーと思ったことを２つ紹介しておきます。最初はワシントンの日本大使館からの推薦状つきではありますが、

●●●・・・・

それは、ホワイトハウスの見学です。この時期アメリカの首都はテロからの防御でいろいろなところが改造工事中でした。特にホワイトハウスは周辺の公園を広範囲にわたって改造していました。しかし、一方で大統領選挙の真っ只中でした。開かれたところも見せなければなりません。文化交流という大義名分が通り見学させていただいたのはいいのですが、まぁ、パスポートだけを持って裸で見学したと思ってください。大変な思いをしました。

ふたつ目は、演劇に関係します。演劇関係者なら誰でも知っており、一度は観劇してみたいと思っているであろう The Shakespeare Theatre。その 2004 年度幕開け催しもの Michael Kahn 監督の「Macbeth」のチケットが手に入り１０月１７日観てきました。本当に見て来ただけです。聞いていても、悲しいかな私の語学力では聞き分けられなかったのです。でもボディー・ランゲュエッジだけでも十分理解できます。字幕なしの映画をみているより肉声の舞台の方が分かりやすいのは不思議でした。

切符を手に入れてくれた人の話によると、この劇場は、年５回の催し物をやっているようです。９月から年度が始まり、８週間でひとつの劇をやり、２週間で切り替え、８月は４週間休む５２週制度になっているそうです。全部が William Shakespeare のものとは限らないそうです。

今年度は「Macbeth」の次は MaryZimmerma 監督の「Pericles」,Alfred de Musset 作、Michael Kahn 監督の「Lorenzaccio」,Kate Whoriskey 監督の「The tempest」,Oscar Wilde 作、Keith Baxter 監督「Lady Windermere's Fan」と来年の７月まで続くそうです。

切符は二つの大きなメンバー制度で扱われており、年間14,000枚と決まっており、なかなか手に入らないそうです。総経費の３分の１は個人を含む 3,000 の Donors が支えており、ワシントンＤＣのハイソサエティーの社交の場になっているそうです。

劇場の中にはメンバーの部屋があり、一見の客はどうも居辛い感じがしました。席の案内も各入り口で立派ななりをしたボランティァの紳士、淑女が、なにやら会話を交わしながらやってくれています。みな一言二言交わして通り過ぎて行きますが、私は東洋人の不思議な笑みを浮かべてただ黙って通り過ぎました。私を除き観光客は一切いませんでした。普通の劇場とは全く違った雰囲気です。いけないとは知りつつも度胸をきめてビデオを少しばかりまわしてきました。いつか見てください。

その他、ポトマック川の畔にあるケネディーセンターというひとつの建物にオペラ劇場、音楽の大ホール、小ホール、演劇のアイゼンハワー劇場と４つのホールがある殿堂。動物園から宇宙開発まで１０数個すべての博物館が揃っているスミソニアン広場。アーリントン墓地、リンカーン記念館、ジョージ・ダウンタウン、硫黄島メモリー、などなど１ヶ月いたけど毎日通ってついに見切れませんでした。社交の場になっているところ以外すべて無料なのも気に入りました。

千代田区を東京都から切り離し、都道府県以上の予算を付け特別区にしたような首都ワシントンはすべての面でそれこそ特別でした。

あとは土産話にとっておきます。